連載　土木技術者評伝

嘉南大圳設計者　八田與一技師（1）
―台湾で愛され日本人に知られていない偉大な土木技術者―

川　本　正　之

2005年2月の末頃，社団法人日本機械土工協会の山崎会長から「嘉南大圳（かなんたいしゅう）」「珊瑚潭（さんごたん）」という言葉の意味を教えられた。さらに2005年3月14日になって産經新聞の記事を渡された。それには，この事が「凛として」という単行本で産經新聞社から発売されると書かれていた。会長から上述の言葉を教えられたのは，今の中国が「日本何するものぞ」という風潮になってきているという話からであった。

台湾で戦後，日本人の銅像がすべて撤去された中で，八田與一の銅像だけは地元民から「神様」だといって，もとの位置に設置されていると聞いたのである。早速，土木技術者の大先輩，八田與一について調べてみたいと矢も盾もたまらず，「凛として」を購入し中に書かれている参考文献を図書館に出かけて資料をあさった。

2005年4月に相次いで北京・上海で日本に対する，反日デモが繰返され，日本人に怪我人が出たり，日本人の店が襲撃され在外公館にも被害が出ている。こういう時だからこそ，日本と中国の多くの人々，特に日本の若い人の目に触れ，かつて不幸な歩みを経験した日中関係の歴史の中にも八田與一に見られるような一芒の光が射していたことを想起してもらいたいと思い筆を執った（本文中敬称略）。*

キーワード：八田與一，嘉南大圳，ダム，3年輪作制，セミハイドロリックフィルダム工法

（1）　姿を現した銅像

地面に腰を下ろし，片足を投出して静かな水面を見下ろすブロンズ像が台湾南部の山の中にある。「ただひとつ残る日本人の銅像」として八田與一の名が日本で知られ始めたのは，平成に入ってからであろう。

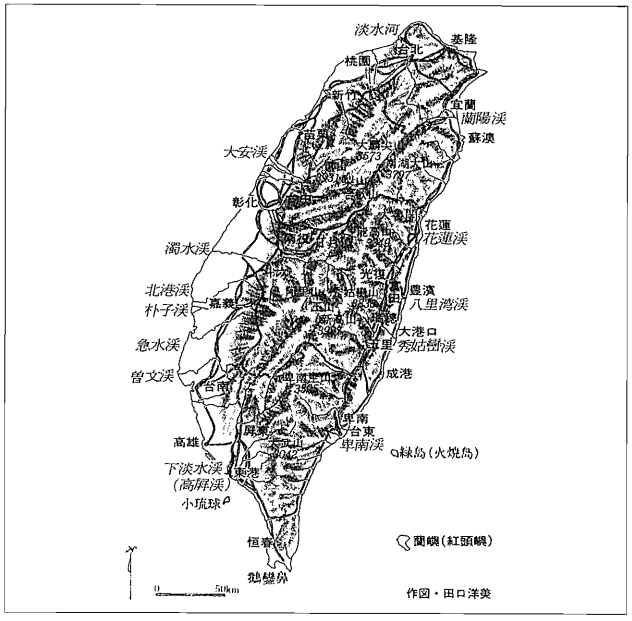
昭和6年に設置されたこの像は昭和19年に取外され，その後は灌漑用ダムの脇にある管理事務所の隅に人目を偲ぶように置かれてきた。昭和56年になってようやく元の位置に戻された。「不毛の土地にダムを造り，おかげで皆が豊かになった。自分たちの神様は八田先生だと農民たちがいうのでびっくりしたんです」と，台湾・奇美実業の創立者，許文龍（きょぶんりゅう）は嘉南（台湾中部の嘉義（かぎ）から台南にかけての平野）に釣りに行ったときの会話を聴衆に紹介した。

平成16年6月14日「金沢市立ふるさと偉人館」を訪れた許文龍（76）は，予定外の講演を頼まれて演壇に立った。許文龍はABS樹脂と液晶パネルでは世界有数の奇美実業オーナーだ。資産1千億円以上といわれ，台湾では立志伝中の人物で，台湾総統府資政（顧問）も務めている。

この日の訪問は，金沢出身の技術者，八田與一の胸像を同館に寄贈したためだった。本来は平成16年5月29日の除幕式に出席の予定だったが，20日が陳水扁台湾総統の就任式にあたっていた。相手陣営が選挙無効を訴えて情勢が揺れており，来日を延期したのだ。

許の記憶に残る昭和10年代の嘉南は豊かだった。「嘉南平野から来る人は食事もよいし，着る物もよい。田舎には豊かな家が多い。その理由がよく分からなかった」。しかし昭和5年（1930）に完成した「嘉南大圳」のことは知っていた。

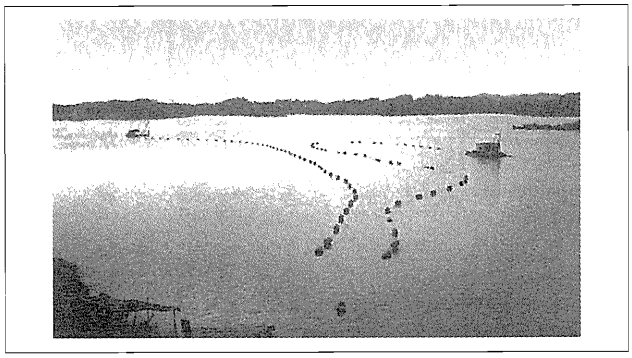
嘉南大圳（**図―1**，**写真―1**）とは香川県ほどの広さを網



図―1　台湾の嘉南大圳の灌漑範囲（古川勝三著「台湾を愛した日本人」より転載）

＊　なお，本文をまとめるにあたって，出版社及び著者の了解を得て下記の参考文献から一部，写真及び文章を引用・転載しました。

1）　産經新聞「凛として」取材班，「凛として　日本人の生き方」，産經新聞（2005）
2）　古川勝三著，「台湾を愛した日本人」，青葉図書



写真―1　像が見下ろす湖は現在も嘉南平野に農業用水を供給している
（産經新聞「凛として　日本人の生き方」より転載）

の目のように覆う灌漑水路で総延長は万里の長城の6倍になる。総延長1万6千kmだが，それを造った技師の名を知ったのは像が現れて後のことだった。調べるうちに大変な偉人であることがわかったという。「いきなり愛知用水の十倍くらいの水がどおっと来る状態を想像してください。貧しい農民ならずとも涙が出ますよ。日本人は八田先生の業績を思い直し，自信を持ってもらいたい」。許文龍の目には感涙が溢れ聴衆は驚いて見入った。

（2）　この人の事を知ってほしい

調べているうちに分かったが，日本で知られたのは平成に入ってからと記されているけれど，実は昭和34年4月号の月刊誌「文藝春秋」に同じ台南出身の実業家・邱永漢（80）が，作家として「台湾の恩人・八田技師」という詳細な記事を書いていたのである。

その中に書かれているが，日本人による台湾統治は明治28年（1895）から昭和20年（1945）まで，ちょうど50年である。日本人による台湾統治が49年でもなく51年でもなくきっかり半世紀だったことは，思えば不思議な話である。一口に50年というが，人生50年といわれた時代の50年である。

日本の影響が強烈なものであったことは，台湾人の言語や習慣の中に取入れられた日本語や日本的風習をみれば一目瞭然であろう。日本の文化は，この50年の間にさまざまの形で台湾人の生活に根を下ろした。それはそれだけ台湾人を日本人に近づけることになったが，同時にまたそれだけ台湾人を大陸の中国から遠ざけることにもなった。

したがって戦後，台湾の統治権が日本から国民政府へ引渡された時，国民政府の支配者たちが真先に手がけ，そして，もっとも執拗に闘い続けたのは，これらの日本色を台湾全島から一掃することであった。台北市の大広場にあった，後藤新平の銅像や台南市にあった児玉源太郎の銅像はいち早くひきずりおろされ，その代わりに蒋介石の銅像が立てられた。

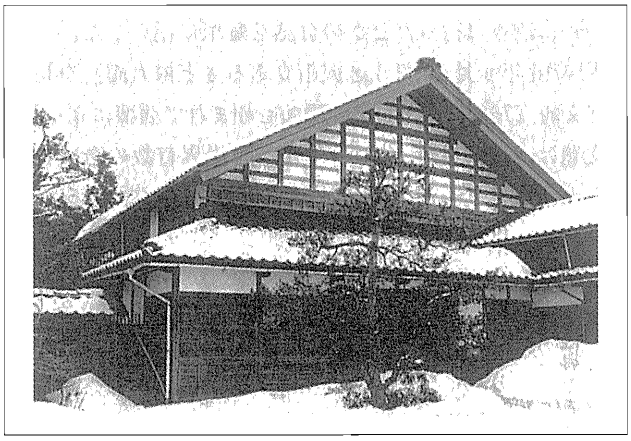
ところがこうした日本色を一掃する潮流にも押し流されず，それどころか逆に戦後になって台湾の人々によって新しく墓まで建ててもらった一組の日本人夫妻がある。この一組の夫妻こそ八田與一・外代樹夫妻である。

八田與一技師の銅像は，彼が10年の歳月をかけて築きあげた烏山頭のダムの堤防の上に昔，彼がよくそんな格好をして座ったままの姿で，いまなお座り続けている（**写真―2**）。彼の見下ろす遥か下には宮田渓の水をせき止めて作られた灌漑用ダムの洋々たる湖が輝いており，この水利により，洪水，干ばつ，塩害の三重苦に泣かされた不毛の地は「台湾の穀倉地帯」へと生まれ変わり，嘉南60万人の人々に経済的恩恵を与えるようになった。嘉南の人々は歓喜し，八田與一の名はこのときから農民の心の中に刻まれ「嘉南大圳の父」として，政治の厳しい現実を乗越えて，いまだに在りし日の彼の功績に感謝の意を表すことを決して忘れないでいるのである。

写真―2　珊瑚潭を見下ろす八田技師の銅像と夫妻の墓石
（古川勝三著「台湾を愛した日本人」より転載）

（3）　胸に抱く大計画

八田與一は石川県河北郡今町村の豪農，通称「八田屋」，八田四郎兵衛の五男として生まれた。明治19年（1886）2



写真―3　金沢市今町にある現在の八田家の豪農を偲ばせる家である
（古川勝三著「台湾を愛した日本人」より転載）

月21日の雪の深い日のことであった（**写真―3**）。

父四郎兵衛は，八田屋5代目の主人で，15町歩もの田畑を奉公人を使って耕作する傍ら，馬喰を行う剛直至誠の人で村民の信望も篤かった。

母サトは，石川郡潟津村字西蚊瓜の出身で，西田又兵衛の長女であり四郎兵衛よりひとまわり若かった。サトは9人の子供に恵まれるが，うち3人の女の子は生後まもなく死んだため，與一が生まれたときには長男誠一，次男又五郎，三男智證，四男友雄，それに四女くんだけが成長していた。

今町村は金沢の北東6km，白山麓のふもとに位置する米作と花奔栽培の盛んな土地であった。花奔栽培については「越後の今町絹所，加賀の今町花所」と昔から歌に詠まれるほど，有名な産地であった。今町が花奔栽培で有名になったのは，寛文年間，金沢三構の地にあった真宗大谷派正福寺の住職をしていた光学が，花を好み村人に花奔栽培を奨励したからだという。村人には，真宗門徒が多かったことから，住職の教えを聴入れ，花作りに手をつけたのが始まりといわれている。

身分意識が残る明治の田舎では，裕福な家の子供が人の中心に立たされやすかったこともあろうが，與一には親分肌なところもあったのだろう。後年，與一はしばしば仕事で部下に雷を落としながらも人望を失わず，また本島人（台湾人）と日本人を差別なく扱ったことでも慕われた。

戦前の農村は長子相続のため，豪農であっても五男には将来，居場所がなくなる。中学校で数学を得意とした與一が学問の道を選び，外地に勇躍したこともうなずける。明治43年（1910）7月，與一は24歳で東京帝國大学・工学部土木科を卒業後，すぐに台湾総督府の土木部に就職した。台湾は日本領土となってまだ15年目であり「技術者として大きな仕事ができるから」と，與一は後に理由を語った。

與一も大正5年（1916）「桃園埤圳」の設計を担当した。台湾北西部の平野2万2千haを灌漑する事業で，與一の期待していた「大きな仕事」だった。現在でも台北の松山空港から南に飛び立つと，眼下に細い水路で結ばれた約8千もの溜池が光って見える。川からの水路の途中に溜池を数多く配して雨水も蓄える設計となっている。9年かけて完成した後の，灌漑地域の米の収穫量は4倍に増えた。

だが與一は1年でこの工事を離れ，その後10年近く台湾南部の山奥に住み続けることになる。そのきっかけとなるのは，「台湾南部の急水渓にダムを造れば相当な灌漑が可能」という報告が，嘉義の役所から総督府に送られたことであった。

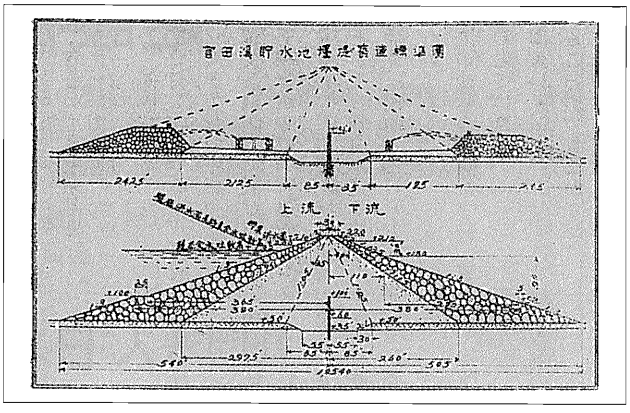
早速上司の指示で與一が調査したが，報告ほどの水量はなかった。だが與一はこのとき，近くの曽文渓の支流で，江戸時代初期に台湾を支配していたオランダ人の遺跡に注目している。それは煉瓦造りの小さな灌漑用ダムだった。半ば崩れた煉瓦を見ながら，與一は何を思ったのだろうか。この支流は水量が足りないが，後ろの烏山嶺という山の向こうには水量豊富な曽文渓の本流がある。トンネルで水を通せば大きなダムを造れる。嘉南平野に広く水を配るのにこの場所は都合がよい…，などと想像が膨らんだことであろう。

そのころ故郷の金沢では，31歳になっても仕事に没頭している與一の嫁探しが行われていた。與一は兄に「金沢出身で兄の気に入る人ならかまわない」と伝え，送られた写真を見て結婚を決意している。

新婦の米村外代樹は兄の友人の医者の娘で，金澤第一高等女学校を首席で卒業した才女だったが，まだ16歳である。外代樹の親戚一同は「15歳も離れている」「何で台湾なぞへ」と反対したが，與一が金沢へ帰って，大正6年（1917）に結婚式が行われた。

このオランダ人の灌漑用ダムの脇に巨大なダムを建造し，全嘉南平野を灌漑するという計画案を與一は総督府に申し出た。前代未聞の大規模な工事である。総督府では「気が遠くなる」「想像もつかない」との声が上がった。だが，総督府としては台湾での米増産につながる案は，採用せざるを得ない事情があった。大正7年（1918）7月には，内地で米価の高騰から「米騒動」が起きている。米屋だけでなく警察までが焼討ちに遭い，2万5千人が検挙された。その前年のロシア革命の影響とも考えられ，政府は沈静化に躍起になっていた。

国の補助金をもらうためには，帝国議会に計画案を認めてもらう必要があり，與一は大正8年（1919）3月から80人以上の部下を率いて嘉南平野の測量と予算作りに没頭した。ダム建設予定地とされた烏山頭にも測量小屋を造った。人里離れた奥地で，マラリア蚊などがおびただしい地域である。與一は午前2時に就寝し，5時半には起き出すので，眠くて仕方がない部下も全員が朝5時半から夜11時まで働いた。こうして何とか予算案を議会に間に合わせること



図―2　烏山頭堰堤の断面図（古川勝三著「台湾を愛した日本人」より転載）

ができた（図―2）。

（4） 家族とともに

台湾最大の嘉南平野は，中部の嘉義から台南にかけて広がり，北に濁水渓，南に曽文渓が流れている。これから取水して，60万人の農民が住む15万haを灌漑しようというのが八田與一の考えだった。台湾全耕地の五分の一に相当する広さだった。まだ日本にない直径9mのトンネルや高さ56mのダムを築造することになる。だが完成後の水量は，灌漑地域に必要な量の1/3しか得られないことが最初からわかっていた。

ここで與一は，社会主義経済の先取りともいえる管理体制を考えている。嘉南平野の主な作物は米，サトウキビ(甘庶)，芋などの畑作だが，稲作は大量の水が必要であるのに対し，サトウキビはさほど必要でなく，畑作はほとんど要らない。そこで，これら3種を順番に作れば，水は3年に一度だけ配給すればよいことになる。與一は「3年輪作制」と称していた。

許文龍も指摘しているが，「過剰な投資」との批判は当時からあった。だが，この壮大な計画案が実現すれば，台湾に大増収をもたらすことは総督府官僚の面々にも理解できた。内部で会合が重ねられ，大正9年（1920）に與一案が正式に採用され，国庫補助も認められた。

山奥の原生林の中に「烏山頭出張所」や従業員の宿舎村の建設が始まった。與一は上司にかけあい，仕様を「単身」から「家族」へ変更させている。費用も掛かるうえに，家族をマラリアの危険にさらすことへの批判もあったが，「家族とともに建設に加わるのでなければ，この大事業は不可能だ」と與一は主張した。そして自ら結婚3年目の妻と生まれたばかりの子とともに乗込んだ。

烏山頭には小学校や病院，そして遊戯施設が整ったクラブまでが建てられ，山中に技術者や家族ら約千人が住む日本人集落が出現した。

烏山頭出張所は與一の宿舎の目の前にあり，毎日決して遅刻することなく出勤した。後にポーズにもなったが，與一には考え事をする際，髪の毛を数本指でつまんでいじり，ときにはむしる癖があった。考えが順調だと後頭部の毛をひねったが，前頭部に回ってくるといらだちの印だった。さらに毛を引き切る音がすると危険信号で，雷が落ちるのを予知した部下に緊張が走った。

「なにしろ思い詰めると，そのものになりきってしまうので，そのときに接触するとあまりのぶっきらぼうさに面食らう」とある部下は人柄を回想している。その一方で，機嫌のいいときは，「ほとんど上下の隔てなしに打ち解けて談笑の花を咲かせる」人柄でもあった。

與一は46歳まで人里離れた山中に住込み，嘉南大圳の工事を監督した。戦前，日本人の平均寿命が50歳を超えなかったことを考えると，まさに生涯を賭けた仕事であったといえるだろう（次号に続く）。

［筆者紹介］
川本　正之（かわもと　まさゆき）
社団法人日本機械土工協会
技術委員長

建設機械用語集

・建設機械関係業務者一人一冊必携の辞典。
・建設機械関係基本用語約2000語（和・英）を収録。
・建設機械の設計・製造・運転・整備・工事・営業等業務担当者用辞書として好適。

B5判　200頁　定価2,100円（消費税込）：送料600円
会員1,890円（消費税込）：送料600円

社団法人 日本建設機械化協会

〒105-0011 東京都港区芝公園3-5-8（機械振興会館）　Tel.03(3433)1501　Fax.03(3432)0289